巻　頭　言

35 年前に入会した会員のつぶやき

日本原子力研究開発機構
平出 哲也

「日本の放射線化学の研究も，いつの間にか，10 年をこえる年月を歩んだ．」と会誌第 2 号（昭和 41 年 10 月発刊）では篠原健一先生が「放射線化学の 10 年をかえりみて」という題の巻頭言で書かれておれらます．日本放射線化学会は，昭和 40 年に誕生してから，すでに 50 年以上が経過しました．そして，日本の放射線化学の研究は 60 年以上を経過したことになるわけです．その始まりは私の生まれる前のこととなります．それほど伝統のある学会であると言えます．放射線化学討論会に関して言えば，会誌第 2 号に第 9 回放射線化学討論会のプログラムが載っています．私が生まれた年には第 5 回の放射線化学討論会が開催されていたということになります．私自身は陽電子科学研究が中心であり，その中で陽電子を利用した放射線化学研究を行っています．会誌第 2 号の第 9 回放射線化学討論会プログラムによると「ポジトロニウム寿命測定による活性種の研究」という発表が東大によって行われております．放射線化学研究の中での陽電子利用研究を継続，発展させて行かなくてはいけないと感じます．過去の会誌が WEB で公開されており，閲覧することができます．私は現在，会長だけでなく編集委員長も兼任しており，皆様にもぜひ，過去の会誌を見て頂ければと思います．是非とも，過去の会誌を若い方々にもご活用頂きたいと思います．

会誌第 2 号では篠原健一先生は，さらに，「放射線化学の初めに研究のきっかけを作る大きな貢献をされた，倉敷レイヨンの常務取締役であられた，友成九十九氏を忘れることはできない．」と書かれておられます．「友成氏は，我々に，ポリビニルアルコールその他の高分子の放射線照射の研究を託してくると同時に，極めて精力的に，放射線高分子学の研究の気運を推進するために，各方面に働きかけられた．」と書かれています．その後，昭和 31 年に理研でコバルト 60 によるガンマ線照射ができるようになり，その後，瞬く間に多くの施設が作られ，その間の放射線化学研究の進展は目覚ましいと篠原先生は書かれておられます．また，学会発足 9 か月で会員数が 230 名を超していると記されており，発足当時の放射線化学会の状況が垣間見られます．このような時代に戻ることは困難かもしれませんが，学会をより良い方向に向かうためのヒントがあるのではないかと思います．私は，それは人だと思います．かつて，友成氏が行われたことを今誰かが行うのは難しいかもしれませんが，我々ひとりひとりがもっと人と繋がることを意識して少しだけ積極的に行動することが大事だと思います．そして，かつてのように，連携によって，新しい時代のきっかけを皆さんで作って行けたらと思います．「具体的に何をすればいいのか？」と考える前に，いつもこだわりを持って行動することで，何かが変わり始めます．私はそう信じています．年代を超えた繋がりも大事です．少なくとも，私が学会に加入した 35 年前には，若者がいろいろなところで声をあげていました．これからの放射線化学を作って行く，学生も含めた若い方々にも，何か行動して頂きたいと思います．そして誰よりも，本学会を現在支えておられる先生方にも，こだわりを持った行動を期待します．皆様のご協力によって，学会はより良い場所になっていくと信じております．皆様，すこしだけこだわりを持って行動しましょう．

Tweet from a member who joined JSRC 35 years ago
Tetsuya Hirade (*Japan Atomic Energy Agency*),
〒319–1195 茨城県那珂郡東海村白方 2–4
TEL: 029–282–6552, E-mail: t.hirade@kurenai.waseda.jp